

落城した砦の地下牢で  
敵国の将軍にカントを  
暴かれた騎士見習いが  
「戦利品は俺が直接検  
分する」と鎖で繋がれ  
たまま朝まで犯される  
話

「あ……っ、な……何、を……っ」

冷たい石壁に背中を押しつけられ、頭上で括りつけられた両手首に鉄環がずしりと食い込む。鎧はとうに剥がされた。囚人服の下穿きは膝まで引き裂かれ、股間が夜気に晒されている。

目の前で片膝をつく男の大きさに、息が詰まった。

帝国軍の黒い軍服。左頬を走る古傷。松明の橙色に照らされたその顔を、エミルは下から見上げることしかできない。

ゲオルク・ヴァルトシュタイン。

敵国ガルディア帝国東方戦線軍の将軍——鉄鎖のゲオルクと呼ばれる男が、革手袋を外した素手で、エミルの太腿の内側に触れていた。

「……ほう」

低い声が落ちる。

将軍の掌が太腿を包み込んだ。エミルの拳ひとつ分はある大きな手。指は長く、関節が太い。武人の手だ。なのに爪は短く綺麗に整えられていて、その不釣り合いな丁寧さが妙に引っかかった。

その手が、ゆつくりと——太腿を這い上がる。

「っ……」

エミルは奥歯を噛んだ。声は出さない。泣かない。騎士見習いとしての矜持だ。たとえ鎖に繋がれていても、敵に屈した姿だけは見せない。

將軍の指先が、股の合わせ目に触れた。

びくっ、と腰が跳ねる。

「……っ！」

自分の身体の反応に、エミル自身が驚いた。触れられたただけだ。ただ指が——そこに、届いただけだ。なのに腰が勝手に動いた。革と鉄の匂いがする指先の体温に、反応した。

ゲオルクの切れ長の目が、薄暗がりの中で光った。

「戦利品は俺が直接検分する。——お前の身体の全てをだ」

——その言葉の意味を正確に理解する前に。

エミルの意識は、数刻前に巻き戻った。



三日間の籠城だった。

ホルンシュタイン砦。北辺境の山岳に築かれた堅牢な砦が、帝国軍の猛攻の前に膝を折った。

城門が破られた時、養父は——騎士団長アルベルト・ファウストは、エミルの肩を掴んで言った。

「お前は生き延びろ」

養父の手は大きかった。ゲオルクとは違う、節くれだった農夫のような手。その手がエミルを育てた。孤児だったエミルを拾い、剣を教え、身体の秘密を隠し通してくれた手だ。

その手が離れた。

養父は城門に向かい、そして、戻ってこなかった。

(……団長)

涙は出なかった。泣けない性質だ。代わりに唇を噛んだ。鉄錆に似た血の味が、舌の上に滲む。

降伏する騎士見習いを、帝国兵たちは粗雑に扱った。鎧を剥がされ、簡素な囚人服を着せられ、地下牢に放り込まれた。両手首を鉄環で壁に繋がれ、鎖の長さは腕を下ろせる程度しかない。

石壁は冷たく、天井から地下水が絶え間なく滴っている。暗闇と、水音と、自分の呼吸だけが世界の全てになった。

(……叙任式は、来月だった)

騎士になるはずだった。養父と同じ紋章を胸に、正騎士として立つはずだった。

もう叶わない。

けれどそれよりも——身体のことだ。

カントボーイであること。男の骨格に女の性器を持つこと。それを知っているのは養父と、砦の軍医だけだった。軍医は落城の混乱で逃げた。養父は死んだ。

つまり、この砦にエミルの秘密を知る者はもういない。

(……一般の捕虜として扱われるはず)

そう思った。身体検査さえなければ。

鎖の重みが手首に食い込む。疲労と緊張で意識が朦朧としていた。このまま眠れたらいいのに、と——柄にもないことを考えた。

松明の光が近づいてきたのは、それからどれほど経った頃だったか。

重い足音。二つ、いや三つ。

地下牢の鉄格子が開く音がして、黒い軍服の男が松明を手に入ってきた。背後に部下が二人。

ゲオルク・ヴァルトシュタイン。

その名を知っていたのは、戦場で幾度も耳にしたからだ。鉄鎖のゲオルク。帝国軍きつての知将にして猛将。百九十はある長身が、低い天井の地下牢では一層巨大に見えた。

將軍は捕虜名簿に目を落とした。

「エミル・ファウスト。騎士団長ファウストの養子。騎士見習い。十八歳。——随分若いな」

淡々とした声。尋問というには静かで、会話というには冷たい。

エミルは黙って頷いた。名前と階級と所属——それ以外は答えない。騎士の矜持だ。たとえ見習いでも。

ゲオルクは小さく笑った。感心したような、あるいは品定めするような。

「度胸はあるらしい。だが——」

將軍は部下に目配せした。二人の兵が敬礼して退室する。

鉄格子が閉まり、二人きりになった瞬間、空気が変わった。

松明の火が揺れた。

ゲオルクが懷から一枚の紙片を取り出す。

「お前の養父の遺品を整理していて、面白い書類を見つけた」

エミルの背筋が凍った。

「執務室の金庫に保管されていた身体検査記録だ。——養父が握り潰したはずの」

紙片が松明にかざされる。文字が浮かび上がった。

「生殖器異常——女性器保有。カントボーイ」

將軍の目がエミルを捉えた。

「お前のことだな」

血の気が引いた。

けれどそれは——バレた恥ずかしさとは違った。

養父が。

自分を守るために。破棄したと思っていた記録を——万が一のために、金庫に保管していた。その庇護が、養父の死によって、敵の手に渡った。

養父の最後の砦が、崩れた。

（もう……誰も、いない）

守ってくれる者が。隠してくれる者が。もう誰も。

「泣かないのか」

ゲオルクの声が、意外なほど静かにエミルの鼓膜を打った。

「……騎士は泣かない」

「お前はまた騎士見習いだろう」

沈黙が落ちた。

水滴が石床を打つ音だけが、地下牢に反響している。

ゲオルクが一步、距離を詰めた。革手袋を片方外す。

素手がエミルの顎に添えられた。

大きな手だった。顎から頬まで覆ってしまふ。指先が耳の下に触れ、掌の体温が顎骨に伝

わった。強引に顔を上向かせられ、至近距離で將軍の目を見る。

「……戦利品は俺が直接検分する」

低い声が、宣告のように降った。

「これは帝国軍の慣例だ」





そして——今。

時系列が追いついた。

ゲオルクの指がエミルのカントに触れている。

最初は——本当に「検分」のつもりだったのかもしれない。將軍の表情には冷静さが残っていた。指で割れ目をゆっくりと開き、構造を確かめるように、一つ一つの部位を確認していく。

「っ……な、触るな……っ」

「黙っている。すぐ終わる」

ゲオルクの中指が、小さな突起に触れた。

「ひあっ!?!」

エミルの身体が弾かれたように跳ねた。鎖がガシャンと鳴り、壁の鉄環が軋む。

「……ここが何か分かるか」

「し、知らない——っ」

「クリトリスだ。お前の身体で最も敏感な場所だ」

ゲオルクの目がエミルを射抜いた。

「触ったこともないのか」

エミルは首を横に振った。本当に知らなかった。カントは「不具合」だ。極力触れないようにしてきた。月経の処理以外であの場所に自分の指を近づけたことすらない。

（俺の身体に……こんな場所が……っ）

將軍の目の色が変わった。

冷静さの奥に——何か、灯る。

「……そうか。誰にも教わらなかったのか」

声のトーンが落ちた。ほんの僅か。しかし確実に。

ゲオルクの指の腹がクリトリスを軽くこすった。硬い突起を転がすように。コリ、コリ、と。

「ひっ……あ……っ、や、やめ——」

「ほう。声が出るな」

「ちがっ……これ、は……っ」

何が違うのか、エミル自身にも分からなかった。ただ——知らなかった。自分の身体にこんな場所があったことを。触れられるとこんな——電気みたいなのが背骨を駆け上がることを。

（なんだ……これ……っ）

指が割れ目を上下に撫でた。ゆっくりと、探るように。親指がクリトリスを押さえたまま、中指が下に滑っていく。

ぬるり、と——何かが指に絡んだ。

「濡れてきたな」

「……え？」

「お前の身体が出した液だ。快感を覚えた時に分泌される」

ゲオルクが指を持ち上げた。松明の光に、透明な糸が指先で光る。

エミルは見た。自分の身体から出たものが、將軍の長い指を濡らしているのを。

「かい……かん……？」

「気持ちいいということだ」

（気持ちいい？ 今の俺が？ そんなはずは——）

けれど指が離れた瞬間、下腹に空洞のような物足りなさが走って、エミルは自分自身に愕然とした。

「……っ」

ゲオルクは見逃さなかった。エミルの腰が微かに前に動いたことを。指を追うように。

「正直な身体だ」

「ちがう……っ！ 俺は——」

「否定しなくていい。身体の反応は嘘をつかない」

ゲオルクの素手がエミルの太腿を掴んだ。片手で膝を押し広げ、掌が内腿に沈み込む。指の跡が白くなるほどの力——なのにそこから先、カントに触れる指だけは繊細で、一つ一つの反応を確かめるように動いた。

そのギャップが、エミルの頭を混乱させた。

「中也確認する」

「ま……待っ——」

中指が膣口に触れた。ぬるりと濡れた入口を、指先が円を描くようになぞる。

そして——ゆっくりと、入ってきた。

「あっ……」

初めて異物が入る感覚。痛みはほとんどない。十分に濡れていたから。だが中を指が進んでいく圧迫に、全身の毛が逆立った。

「力を抜け。傷つけるつもりはない」

ゲオルクの声は落ち着いていた。教師が生徒に語りかけるような。その安定感がかえってエミルの混乱を深くした——敵の将軍に指を入れられているのに、その声にだけは身体が緊張を解いてしまう。

（やだ……なんで……この男の声で……力が抜ける……っ）

指が中を探った。壁面をなぞるように、ゆっくりと。

ある場所に指先が触れた瞬間——

「ひあっ♡ ……っ！？」

腰が大きく跳ねた。鎖がガシャンと鳴って、頭上の鉄環が石壁を叩く。

「ここか」

ゲオルクの指が、そのざらついた壁面を繰り返し撫でた。

「あっ、あっ、な……何それ……っ♡ やだ……っ、何か、へん……っ♡♡」

「へんではない。これがお前の身体の正常な反応だ」

冷静な声。事実を伝えるだけの声——のはずなのに、指の動きは確実にエスカレートしていた。撫でる速度が上がり、圧が増し、ざらつきを指の腹でぐりぐりと押し込む。

「おっ♡ おっ♡ やだ、やだ♡ お腹……へん……っ♡♡ 何か……下から突き上げてくる……っ♡♡」

喘ぎ声が地下牢に反響した。石壁に跳ね返って、自分の声が四方から戻ってくる。

（やめろ……やめてくれ……っ♡ 俺は男だ……こんな声……出していいはずが——）

ここでゲオルクがエミルの身体の向きを変えた。鎖が許す範囲で、壁に嵌め込まれた金属板の方を向かせる。

磨かれた金属の表面に——鎖で繋がれた自分の姿が映っていた。

「見ろ」

「やだ……っ♡ 見たくな——」

「見ろと言っている」

ゲオルクの空いた手がエミルの顎を掴んだ。大きな掌に顎を包まれ、逃げ場を奪われる。金属板の方を向かされた。